

柔らかでたわわな二つの房を鷲掴みにすると、汗の甘酸っぱい芳香を微かに漂わせている深い狭間に顔を埋めた。

「あふ……あ、ア、あッ……あァん……」

胸の谷間の奥深いところにロマーリオの熱く荒い鼻息を感じ、そこが汗ばんでいることを恥じるが、肉厚な舌は躊躇いもなくつううつと這い上がってきて、またすぐ元来た道へと戻っていく。

溜まった汗を全て拭う勢いで舌が上下する間、がっしりと双房を掴む掌もお留守になることなく、むぎゅつと指が食い込むほど強く揉んだり、やわやわと撫でさするみたいにしたりと、緩急のついた刺激を絶えず与えてくる。

「ハア、はっ……んッ……はァあ……」

オッパイだけじゃなく、もつと他のところも愛してほしい。でもきつとこれは序の口で、これからもっと激しいことオッパイにされるんだ。

まだまだオッパイばかりいっぱい弄られ続けるんだ、絶対……

そんな確信めいたものが、ディーノの中にあった。

そしてそれは、数秒後に的中した。

「ひゃん!!」

ロマーリオの手がにわかにぐいっと柔肉を持ち上げ、そこに隠れていた付け根部分にべちょつと舌が押し当てられて。

そのままソレは溝をほじるように、つーっとバストのアンダーラインを辿っていく。

「ひああ……や……んんんっ!!」

快感というよりは擦ったさが先に立ち、堪らず身を仰け反らせると、囁かずも突き出す形になってしまったもう一方の付け根にもレロオツと舌が這わされた。

「汗、いっぱい……かいちまったから汚……ああアッ……」

申し訳なさから制止の声を零すが、舌は気にしないとやわんばかりに、蒸れて谷間よりも汗を噴いていたであろう柔肉の裏側の付け根付近をヌメヌメと何度も往復する。

そのうちに、それだけでは飽き足らなくなったのか、今度は柔肉の傾斜面を上り、頂に向かってゆっくりと進み始めた。

新たな愛撫の予感に期待が高まり、突起がキュンと硬度を増す。

しかし舌はその近くまで来るとピタリと動きを止め、そこに触れる事無く麓へと下って行ってしまった。

その後も舌は強く弱く、早く遅く、時にうねうね蛇行したりと、アンダーバストからトップバストの直前までを行ったり来たりするだけで、もつと異なる愛撫を欲する心身を焦らさせる。

このもどかしい状態は、後どれくらい続くのだろう……そう気が遠くなりかけた頃、ロマーリオが再び谷間へと